

「誓願寺」と時衆——「八万諸聖教、皆是阿弥陀仏」の周辺

高橋 悠介

一、誓願寺と和泉式部

〔誓願寺〕前場では、一人の女人が、誓願寺で「六十万人決定往生」の札を配る一遍と、札の文句をめぐる問答をした後、本尊の阿弥陀仏と一遍を拝む。その後、誓願寺の額を六字の番号に変えるようにという本尊のお告げを伝えると、和泉式部の石塔を指して自らの住处といい、「我も昔はこの寺に値遇のあればすむ」と語り、和泉式部であることを明かして消える。

和泉式部が誓願寺に住んでいたとの伝承を記す現存最古の文献が、重要文化財「称名寺聖教」中の『誓願寺阿弥陀事』（神奈川県立金沢文庫保管）である。枳形粘葉装の説草（説教の台本）で鎌倉後期写、表紙左上に「誓願寺阿弥陀事」、中央に「和泉式部往生事」と書かれ、右上には千字文の「玄」の字が記されている（千字文は多くの資料を整理するための分類記号）。この「玄」字は、『阿弥陀釈』『往生人自筆経功能』『往生要集念仏』など、阿弥陀仏や極楽往生を主題とした資料に同様に付されている。本書によれば、和泉式部は書写山の

性空（証空）から嵯峨の釈迦如来に参るよう示された後、嵯峨、広隆寺、河崎観音堂を巡り、最終的に誓願寺の阿弥陀如来に参り、誓願寺に庵室を設けて往生を遂げたという。

観音示云、誓願寺ノ阿弥陀如来コソ一日三度極楽へ往詣シ御、其へ可参ト。サテ、誓願寺ニ庵室ヲ結テ、専ラ帰シ弥陀ニ、偏ニ欣往生一。最後夕、臨終剋ミ、音楽聞空一、異香薰室ニ、観音ノ迎撰ニ預テ、安養ノ往生ヲ遂タリト申テ候。

二、阿弥陀仏の賛嘆場面

さて、この『誓願寺阿弥陀事』には一遍（二二九九〜八九）は登場しないが、『誓願寺縁起』諸本の中には一遍が誓願寺で念仏札を配った記事を持つ系統のものがあり、謡曲もそうした縁起に基づいたものと考えられている。誓願寺は室町時代、浄土宗西山派（証空の門流）を代表する念仏道場となったが、応仁元年（一四六七）に兵火で焼ける以前は、様々な宗派の僧が入り出す比較的ゆるやかな体制だったらしい。一遍の誓願寺での札配りの伝承は、誓願寺における時衆の活動を背

景にしたものであろう（一遍も西山派の聖達のもとで学んでおり、西山派の教義は一遍の思想の母胎でもある）。

ただし、（誓願寺）には、誓願寺の縁起だけでなく（当麻）の影響も大きく、その中にも一遍や時衆と縁の深い言葉が含まれている。すでに指摘されている一遍の語録類との関連は措き、本稿では、夜念仏で阿弥陀仏を賛嘆する次の場面を取り上げ、考えてみたい。

地頼みぞ実この教へ 或は利益無量罪 シテ
又は余経の後の世も 地弥陀一教と シテ聞
くものを 地ありがたやありがたや、八万
諸聖教、皆是阿弥陀仏なるべし

（当麻）で、一遍を思わせる念仏の行者が当麻寺に着くと登場する、姥とツレの女の、
シテ一念弥陀仏即滅無量罪とも説かれたり

ツレ八万諸聖教皆是阿弥陀仏ともありげに候という詞との類似は明らかである。一遍の法語『播州法語集』にも引かれる「一念弥陀仏、即滅無量罪」などに基づく詞に続く、「余経の後の世も弥陀一教」は、法相宗を大成した慈恩大師基（六三一〜六八二）が『西方要決』で『無量寿経』について「末法万年余経悉滅、弥陀一教利物遍増、大聖特留二百歳」とした文に源がある。末法の世に入って一万年が経つと他の経は悉く滅び、阿弥陀仏の教えだけが残って利益を増す、即ち、お釈迦様は特にこの『無量寿経』をさらに百年この世に留めている、との意である。恵心僧都源信（九四二〜一〇一七）の『往生要集』がこの文句を引用したことから、日本では『往生要集』を通して広

まったくみられ、(当麻)にも「弥陀の教へを頼まず、末の法、万年々経るまでに余経の法はよもあらし」という詞章がみえる。問題は、続く「八万諸聖教、皆是阿弥陀仏」で、「余経の後の世も弥陀一教」と内容的には関連しているが、『西方要決』や『往生要集』にはみえない句なのである。

三、「八万諸聖教、皆是阿弥陀」の句

西山派の光雲明秀撰『愚要鈔』(一四六一一年)にもこの句の引用が確認できるが、浄土宗鎮西派中興の祖、了誉聖因(一三四一—一四二〇)の『釈浄土二藏義』卷九は、「平等覚経ニ云ク、十方三世仏、一切諸菩薩、八万諸聖教、皆是阿弥陀」(浄土宗全書)と典拠を示しており、近世の『謡曲拾葉抄』以下、現代の謡曲注釈書も了誉の記事を紹介している。ただし、江戸中期の時宗僧、賞山の『播州問答集私考鈔』は、『平等覚経』(『無量寿経』の異訳)には当該句がないとし、『秘密神呪経』に「阿字十方三世仏、弥字一切諸菩薩、陀字八万諸聖教、三字之中是具足」とあるのを挙げ、了誉もそれを承知の上であえて『平等覚経』を示したと推測している。出続蔵所収(一一—一三五)の『仏説阿弥陀根本秘密神呪経』に当該句はみえるが、この経は「呪及び功德の文段以外は羅什訳の阿弥陀経に変わらず、菩提流支訳の形を取った「後人の偽作」(『密教大辞典』)であろう。

ここで注目したいのが、遊行上人七代の託阿(一一八五—一三五四)が時衆の教学を体系

化した『器朴論』と『蔡州和伝要』での用例である。託阿は、足利義満の援助を得て各地に寺院を再興した国阿の師でもある。

『器朴論』はこの句(末尾は「皆是阿弥陀」)を三度も引き、平等覚経を典拠としている。特に、『器朴論』第十三「末法弘通門」では、末法の末に諸経が衰えるとして先述『西方要決』の文「末法万年」を引き、その少し後に「八万諸聖教、皆是阿弥陀、八万法蔵之妙肝心故、独留二斯経」としている。『西方要決』の文句と問題の句が結びついている(誓願寺を考える上で、重要な用例と言えよう)。

『器朴論』第十一・第十二には、恵心の『正修観記』に曰く、として、「当レ知、阿弥陀三字、具二俱二千三百九十五卷大乘経・六百八十卷小乗経：(中略)故、唱二阿弥陀三字」、即唱二一万三百二十四卷一切聖教一(大正蔵八十四卷二四b)とし、『蔡州和伝要』も『正修観記』を典拠として同様の箇所を引いた後、『八万諸聖教、皆是阿弥陀』ト云ルモ此意也(大日本仏教全書)とする。『正修観記』には確かにこの箇所があり、関連する文句として注目されるが、「八万諸聖教、皆是阿弥陀」の句そのものはみえない。また、恵心撰とされている『万法仏心法要』には、先述『秘密神呪経』の類似句(大日本仏教全書本では末尾「三学之中皆具足」)がみえ、『恵心僧都全集』所収の『敬白念仏勧進』には「八万諸聖教、皆是阿弥陀」の句そのものがみえるが、これらは恵心に仮託された書である疑いが指摘されている。

そうなると、この句が天台浄土教の中で用いられたかは不明で、特に浄土宗と時衆の間で流通していたことが浮かび上がってくる。管見の限り、確実な用例としては託阿によるものが古く、特に『器朴論』での三度の引用は、この句が時衆の中で占めていた位置をよく物語っている。

四、一遍の言葉——「一代聖教みなつきて」

一遍の弟聖戒がまとめた『一遍聖絵』によれば、一遍は入滅の前、持っていた経を書写山の僧に渡し、所持していた書物を自ら焼き、「一代聖教みなつきて南無阿弥陀仏になりはてぬ」と語ったという。一遍の語録類の最古写本である『播州法語集』(称名寺蔵・金沢文庫保管)にも

又云、一代聖教の所詮、たゞ名号也。(中略)三経并に一代の所詮たゞ念仏を教る也。如レ是しりながら、万事をすて、念仏すべき処に、或は学問にいとまを入れて念仏せず、或は聖教を執して称名せざる物は、他の財をかぞうるがごとし。

とあり、釈迦が一生をかけて説いた經典類は、阿弥陀仏の名号に尽きる、と語られている。託阿が強調した「八万諸聖教、皆是阿弥陀」は、こうした一遍の思想の根幹にもつながる文句である。(当麻)や誓願寺)では、この句が時衆の中で重んじられていたことをふまえて引用されているのであろう。

(神奈川県立金沢文庫学芸員・法政大学能楽研究所客員所員)